

## 生命は授かるもの？選別して作るもの？

「着床前診断」に関しては、以前にHPに記載したことがある（「雑学」バックナンバー - サイトマスコミ等コメント関係P：「2004. 2. 5. 『受精卵診断 男女産み分け』の報道に接して」と「2004. 6.19. またまた、着床前診断に纏わる報道に接して...」参照）が、今朝の朝日新聞文化欄「こころの風景」で、「着床前診断」に関わる記事にまたまた出会った。

記事にはオーストラリアのドキュメンタリ番組で伝えられた2つの実話を紹介している。

一つは、難病を抱えている長男を治すには、遺伝子の適合する骨髄や臓器を移植するしかない。そこで夫婦は、着床前診断によって受精卵を選別し、長男のドナーとなるべき「健康」な子どもを産むことを決断するケース。もう一方は、どちらも聴覚障害の夫婦が、「特定の能力や個性をで選別することが許されるなら、私たちの望みだって不当でないはず」と、同じ障害をもつ子どもを着床前診断で産みたいと手話で主張するケース。

しかも、いずれの夫婦も実名・素顔で番組に登場していたという。

私たちは、時に「なぜ自分はこの世に産まれてきたのか、自分（人間）とは何ぞや」と苦悩することもある。しかし、上記のケースでは、子どもは目的を持ってこの世に送り出されるということになるのであろうか？

こうした夫婦の願いを可能とする科学（医学）技術の発達の現状。我々は、こうした夫婦に対して、何と応えうるのであろうか？そこまで、我々の中での生命観、倫理観等々は、十分に議論されていないような気がする。

益々、こうした現実の問題と向き合う世の中になって行くのであろうなあとは思いますが、果たして我々の生命観、倫理観等々という精神活動は、こうした科学技術の発達に追いつき、追い越すことは可能なのであろうか？

先々の時代がホモ・アルティフェイス（人工人間）がホモ・サピエンス（思考する人間）に取って代わることはないように、エコロジ - 、テクノリジ - 、ヒューマニズムを包括し得る思索（哲学）が、今こそ必要な時代のような気がする。

（2005年3月2日記）